

菅沼正子

～すてきなあなたへ～

## 今も輝くスター55 (4)

～クラーク・ゲーブル～

キング・オブ・ハリウッド

不敵な笑み

キング・オブ・ハリウッドの愛称で呼ばれたクラーク・ゲーブルの魅力は、しばしば“gentle bruteness”という言葉で形容された。日本語にすれば「優しき野獣性」といった表現になるだろう。

彼にはもうひとつ、“impudent grin”（歯を見せてニヤリとする不敵な笑み）というトレードマークがある。これが、他の男優には真似のできない強力な武器になって、アメリカ映画界の帝王へとの上昇がっていったのである。

1901年2月1日、オハイオ州カディス生まれ。両親ともドイツ移民の子孫。父親は油田採掘の労働者で、永住の地のない暮らし。生後7か月で母を亡くし、祖父母のもとで育てられた。2歳のときに父が再婚したためその家に引きとられた。継母には優しく育てられたにもかかわらず、10代半ばで友人と一緒に家出。生みの母への思慕を捨てきれなかったのか、それとも、若い頃から各地を転々とした父の血を体内に受け継いでいたからなのか。まもなく継母の死によっていったん父の元へ呼び戻されたゲーブルは、父とともにオクラホマの油田で働いたが、腰は落ち着かず、21歳で再び家を飛び出してしまう。

観劇がきっかけで、旅回りの劇団に入って苦労を重ねた末、やっとオレゴン州のポートランドに住み着き、デパートの売り場や新聞社、電話会社の雑役係を勤めながら、町の劇団で芝居の勉強を重ねた。この劇団で演技コーチをしていたジョセフィン・ディロンは、かつてブロードウェイの舞台を踏んだこともある女優。ゲーブルは彼女から演技術や俳優としての個性の表現のしかたなどを厳しく教え込まれ、やがて2人の間には師弟を超えた愛が芽生えることになる。そして2人は映画の世界をめざし、まぶしいハリウッドへ。ちなみにジョセフィンは彼より14歳年上。

年の差婚

ジョセフィンと共に希望に胸ふくらませやってきたハリウッドで、2人は結婚はしたものの、やがてはかない破局の訪れ。1931年のことである。離婚を機にゲーブルは1人でニュ

ーヨークへ向かい、ブロードウェイの舞台に立てる日のための努力をくり返すことになる。そんなさなか、かなりの大役をもらった芝居の地方巡業の旅先テキサス州ヒューストンで知り合ったのが、17歳も年上のリア・ラングハム。彼女はヒューストン社交界の花型だった。ジョセフィンとの正式離婚（1931）成立後、ゲーブルはリアと結婚、年若い夫となる。

ゲーブルは生涯に5回の結婚をしている。最初の2人の妻は10歳をはるかに超える年上の女性。この年の差婚は、しがたない油田採掘工の息子が、芸能界で名を出すための功利的な思惑もどこかに秘んでいたのだろうか。あるいは、生まれてほどなく母親の乳房から引き離された産みの母への断ち切れぬ思いが、彼に母性的な愛を求めさせたのか。

それはともかく、リアとの交際・結婚があつてほどなく、彼はニューヨークのヒット舞台『ラスト・マイル』のロサンゼルス公演でいきなり主演を獲得。それはリアの力が大きかったといわれている。そしてそのステージを見たMGM映画のお偉方によって、「惨劇の砂漠」（1931年）に出演のチャンスをつかむこととなる。

こうしてようやく念願の映画界に足を踏み入れたゲーブル。最初のうちはギャングなどワルに近い役が多かったが、わが意に従わせるためなら、平然と女も殴るその傲岸さから、かえって女性観客のハートをしびれさせ、主演にも選ばれるようになったのだ。そしてついに、クラーク・ゲーブルの名を一挙に高めた「或る夜の出来事」（34）の登場となる。

## 映画界の帝王に

「或る夜の出来事」は、新聞社をクビになった記者（ゲーブル）が、大陸横断の長距離バスで、有名な大富豪の令嬢（クロードット・コルベール）と偶然乗り合わせ、彼女が父親に恋人との結婚を反対されて家出中と知ると、それを特ダネ記事にするため、さりげなく彼女に接近。最初はいがみ合っていた2人の間にやがて恋が芽生えて——、というストーリー。それだけならアメリカ映画によくあるお話だが、いけぬがしいけど憎めないゲーブルの個性が、フランク・キャブラ監督の絶妙なコメディ・タッチに生かされて、アカデミー賞の主演男優賞までかささらうほどの結果。一躍トップスターに踊りでたゲーブル、その後もヒット作の連発でドル箱スターとなる。なおこの「或る夜の出来事」はアカデミー賞で作品賞、主演男優賞、主演女優賞、監督賞、脚本賞の5部門を受賞している。

それから5年後の「風と共に去りぬ」（1939）。いまさら説明不要の映画史上最も人気の超大作。私も生涯のベスト1を選ぶなら「風と共に去りぬ」を上げるだろう。原作も、俳優も、音楽も、あらゆる角度から見て、いちばんすぐれている映画だと思う。ゲーブルはこの「風と共に去りぬ」でキング・オブ・ハリウッドの座を揺るぎないものにする。ここでも存分に生かされていたのが、例の“impudent grin”。戦争で荒稼ぎしている粗野なレッド・バトラーが『今夜は嫌と言わせない』と、スカーレット（ヴィヴィアン・リー）をお姫様抱っこで赤いじゅうたんを上っていくあのシーンは、スカーレットならずとも今でも私の胸を高鳴らせる。

ヴィヴィアン・リーの証言によれば「ゲーブルはとても優しい人だったけれど、キス・シーンを演じるとき、彼の総入れ歯のにおいが臭くて困った」とか。だとすれば、歯を見せてニヤリとするあの不敵な笑みの魅力は、総入れ歯のおかげだった、ということ？

### 不運が続く

「風と共に去りぬ」公開と同じ年、別居中のリアと正式離婚。彼が3人目の妻に迎えたのは知的な美貌で鳴らしたブロンド女優のキャロル・ロンバード。彼女は彼より7歳年下で、まさに似合いのカップル。ところが、公私ともに幸福の絶長期に、キャロルは飛行機墜落事故によって急死（1942年1月6日）。ゲーブルの悲嘆は、はたで見るとつらいほどだったという。

第2次大戦後、空軍から復員して結婚した4人目の妻シルヴィア・アシュレーも、55年に結婚した5人目の妻ケイ・スプレックスも年下だったが、ケイの出産を待たずにゲーブルは心臓麻痺で死亡（1960年11月6日）。最後までキングの座に君臨していた。遺作となった『荒馬と女』（61）で演じたのは、金儲けのために走る車上から野生馬を投げ縄で捕らえる、いわば現代のカウボーイ。その撮影が60歳の身にはハード過ぎたための死だともいわれたが、共演のマリリン・モンローを相手に彼の impudent grin はまだまだ健在であった。

### 菅沼正子

～すてきなあなたへ～

## 今も輝くスター55 (5)

～ヴィヴィアン・リー～

まなざしの奥に強烈な個性のきらめき

### 不倫も栄養素のひとつ

あまたいるヒロイン候補を蹴落として、ヴィヴィアン・リーが「風と共に去りぬ」(39)のスカレット・オハラ役をつかむことができたのは、皮肉の見方が許されるならローレンス・オリヴィエとの不倫の恋のおかげだった。マーガレット・ミッチェルのベストセラー小説『風と共に去りぬ』は、1936年5月に発売されるとたちまちベストセラーになり、映画プロデューサーのデーヴィッド・O・セルズニックは映画化権を買い取っていた。彼は直ち

にスカーレットを演じる女優探しを始め、スーザン・ヘイワード、ベティー・デーヴィス、ポーレット・ゴダード、ジョン・フォンテンといった当時のハリウッドのトップ女優たちを次々スクリーン・テストした結果、いずれも彼を満足させることができず、あっという間に2年半が過ぎてしまった。もうこれ以上待ちきれず、主演女優の決まらないままクランクイン。この映画最大のスペクタクルシーンであるアトランタ市街の大炎上から撮影開始。野外ステージいっぱい建てられた街並みが真紅の炎を上げて燃え尽き、撮影の無事成功にホットしたプロデューサーのセルズニック。その前に現れたのが、当時25歳のヴィヴィアン・リー。セルズニックの兄が「お前の待ち望んでいたスカーレットを紹介するよ」と。きゃしゃな体を黒い服に包み、エレガントな物腰とまなざしのヴィヴィアン・リー。セルズニックの頭にはもちろんイギリスの女優など候補に入っていなかったのだが「これぞスカーレット!」と、彼は心の中で叫んだという。そのヴィヴィアンの後ろに立っていたのがローレンス・オリヴィエ。「嵐が丘」(38)に主演するためハリウッドに渡った彼を追いかけて来たのである。

今や伝説と化している<スカーレット発見>のこのエピソードの裏には、実はもうひとつの話がある。映画化が発表された時からスカーレット役を熱望していたヴィヴィアンは、エージェントへの売り込みをオリヴィエに懇願したのだという。ヴィヴィアンは「私の母はアイルランド生まれで父はフランス人の血を引くイギリス人。私の体の中にはスカーレットと同じ血が流れているのよ」と強調したらしいが、それ以上に彼女には、スカーレットの持って生まれた気質や、そこから生まれる行動がよく理解でき、だからこそこの役をどんな女優よりも完璧に演じてのける自信があったのだ。そしてその自信に誤りはなかった。その演技力でみごと「風と共に去りぬ」でアカデミー賞主演女優賞受賞(第12回・1939年)、いきなりトップスターの座に上り詰めたのである。本作は全部で9個受賞。原作に書かれたスカーレットより、ずっと美貌であることも強い味方となったことだろう。わたしはスカーレットのたくましい生命力が好きだ。ラストシーンで故郷タラの土への愛情に目覚め、「わたしは飢えない」と抜いた大きな大根にかみつき食べるあのシーン、あのたくましさ!いまだに忘れられない。

### 裕福な家庭に生まれて

1913年11月5日生まれ。裕福な株商人である父がインドのダージリンに持つ別荘で生まれた。わずか7歳でロンドンに近い修道院の付属寄宿学校に入り、このころから女優になりたいと夢見ていたという。その後もスイスやパリのの上流家庭の子女が集まる学校で教育を受け、学校が休みのときには両親とともにヨーロッパ各地を旅行して演劇や音楽に深く親しんだ。学園祭ではシェークスピア劇の舞台に立ち、ますます女優志願は明確になり、18歳でロンドンの王立演劇アカデミーに入学。

まもなくパーティーで知り合った10歳も年上の弁護士ハーバート・リー・ホルマンに胸

ときめかせ 19 歳で結婚 (1932)。翌 33 年 10 月 12 日には娘スーザンが生まれたが、女優への夢をあきらめきれず、娘の世話は乳母に任せ、助演級ながら映画や舞台に立つようになる。やがて『美德の仮面』の舞台が評判になり主演級で運命の映画「無敵艦隊」(37) でローレンス・オリヴィエと共演。彼はその頃イギリス演劇界の若きプリンスとして名声は上り坂の真っ盛り。2 人とも家族持ちではあるが、撮影の間に燃え上がった恋の炎を消すことはできない。女優としての大成をめざすヴィヴィアンにとって、オリヴィエは愛人であると同時に、またとない演技の助言者でもあった。もはや彼とは離れがたく、夫に離婚の決意を手紙で伝え、娘を母に預けて、オリヴィエと 2 人きりの暮らしに入った。そして「嵐が丘」撮影のためアメリカへ発ったオリヴィエを追って海を渡り、みごとスカーレット役をつかむのである。

アメリカ映画 2 作目は「哀愁」(40)。戦争で引き裂かれた愛、純愛の美しさを描いたメロドラマの秀作。ここでも「風と共に去りぬ」に勝るとも劣らぬ名演技を見せた。そしてヴィヴィアンとオリヴィエはそれぞれの配偶者の離婚が成立できたので、1940 年 8 月 30 日、アメリカで念願の結婚式をあげた。「美女ありき」(41) では胸を張っての共演。この時期から数年が、おそらくヴィヴィアンにとっては幸せな絶頂期であっただろう。

### 精神のアンバランス

彼女の行動に異常が現れ始めたのは「シーザーとクレオパトラ」(45) の撮影が終わる直前に肺結核で倒れたころからだ。オリヴィエに対してひどい醜態を見せるのだ。嵐のようないつきが過ぎると、彼女はそれをまるで覚えていないという。この分裂症的な体質は「風と共に去りぬ」の演技にも現れていたと指摘する人もいる。それが頻発するようになったのはオリヴィエに対するコンプレックスだろうとの指摘もある。

かつては演技上のよき指導者であったオリヴィエ。その彼はシェークスピア役者としてイギリス演劇界の最高峰に上り詰めていこうとしているのに、それにはとても及ばない自分の演技力への焦りや絶望感。人並みはずれてプライドの高い女性であっただけに、その焦りや絶望感がどれほど深いものであったか想像にかたくない。「欲望という名の電車」(51) で、2 度目のアカデミー賞主演女優賞に輝いたのは、考えてみれば、そのあまりに適役ゆえの当然の結果であったともいえるだろう。

「欲望という名の電車」の主人公のブランチは深く神経をむしばまれた中年女。今は没落した南部の大農園の生まれで、妹を訪ねニューオリンズの場末の町にやってきたのだ。妹の夫スタンリー (マーロン・ブランド) の前でも常に教養深いレディーとしてふるまう。故郷では女教師として尊敬を集めていたのだから。ところが今は過酷な現実から逃れようとアルコールに身を持ち崩し、少年を性的に誘惑して故郷を追われ、この町へ逃れてきたにすぎない。それでも精神の気高さは失うまいと、名家生まれのプライドにすがっているのだ。粗野で知性などかけらもない肉体労働者のスタンリーは、そんなブランチの鼻をあかしてやろうと、ついに肉体を犯して、発狂にまで追い込んでいく。美しく繊細な精神性を無知な獣

性によって無残に破壊され、それでもなおレディーらしくふるまいながら精神病院へ送られていくブランチ。残酷ないい方をすれば「風と共に去りぬ」のスカレット以上に、当時のヴィヴィアンにはふさわしい役どころだったのである。やがて彼女にもすべての苦悩からの解放される時がくる。

オリヴィエの献身的な愛に支えられ、いったんは回復したものの、その後のヴィヴィアンの神経衰弱と躁うつ症は高じるばかり。いっときも自分を休ませてくれない妻との暮らしに疲れ果てたオリヴィエは、舞台上で初めて共演した26歳の新人女優ジョン・プロウライトの愛情に安らぎを求めてヴィヴィアンのもとを去り、離婚する。その後のヴィヴィアンは「ローマの哀愁」(61)「愚か者の船」(65)に出演するが、ともに若さとかつての色香を失った女の悲惨を演じて、見る者の胸を痛くさせた。67年、結核が両肺に広がったと宣告されても入院を拒絶していたヴィヴィアン。自宅療養中の7月7日、突然の咯血に気管をふさがれ、ちょうど帰宅した3番目の夫メリヴェールが状況を発見したときにはもう息絶えていた。知らせを聞いてオリヴィエも駆けつけた。父親のような愛をずっと注ぎ続けてくれた最初の夫ホルマンも、年老いた母も、美しく成人した娘スーザンも駆けつけた。死によってすべての苦悩から解放されたヴィヴィアン。その表情は安らかな眠りの底にいる人のように美しかったという。

#### <菅沼正子>

映画評論家。静岡県生まれ。著書に「女と男の愛の風景」「スター55」「エンドマークのあとで」。1972年第45回アカデミー賞、1973年第46回アカデミー賞を記者席で取材。NHKラジオ深夜便で「菅沼正子の思い出のスクリーンメロディ」を2002年から2005年まで担当。地域のミニコミ誌「すてきなあなたへ」(佐倉市)の終刊2015年まで「菅沼正子の映画招待席」を執筆。